



編集・発行 日本オーボエ・クラブ広報委員会
東京都豊島区西池袋3-25-2大晴ビル 栗西池店内
会報関係の連絡先
〒176 練馬区貫井4-16-10-601 猿田 博
郵便振替「日本オーボエ・クラブ」東京 9-89563

第7号 1989年5月20日発行

不許複製

第4回 総会報告

新年恒例の、と言いたいところだがいつの間にか春の恒例となりつつある(?)総会及び親睦会が、去る3月7日、東京・池袋の「榊しおり」にて行なわれた。

総会の議長には前年と同じくN響の浜道晃氏を選出され、総会の成立の確認の後、以下のように議事が進行した。

1. 各小委員会活動報告

事務局、広報、企画、推進の各小委員会からそれぞれ前年度の活動報告と問題点の指摘が行なわれた。

2. 会計報告

会計の安藤禎章氏欠席のため代理で伊藤博氏が前年度の会計報告を行なった。会計監査の佐藤順子氏が現われず、急ぎよ新日フィルの七澤英貴氏がその場で監査を行なうというハプニングがあったものの、無事承認された。(会計報告欄参照。)

3. 役員改選

本年度の役員は全て前年度の役員が再任されることになった。

〈運営委員会(計20名、太字は各責任者)〉

事務局

(書記) 高橋勇美

(会計) 安藤禎章

日本オーボエクラブ会員によるオーボエ合奏団

JR東京駅

エキコンサート出演決定!

企画委員会では、昨年から各委員会と協議の結果、JRエキコンサートに出演することに決定しました。この企画に関しては、吉成行蔵氏のご協力によりエキコン・プロデュース担当の団伊玖磨氏の同意を得、実現する運びとなりました。

エキコン出演により、日本オーボエクラブの存在を広く一般に知ってもらい、また、このイベントを通して会員相互の親睦れをはかるという主旨をご理解いただき、ぜひご協力をお願いします。
コンサートの日時については未

定ですが、会員諸氏の参加しやすい時期を考慮し、決定することといたします。曲目はオーボエ合奏という特殊な編成のため「ヘンデル・王宮の花火」を中心としますが、その他はまだ検討中です。

参加者への出演料は原則としてノーギャラとします(予定)。JR側から得る出演料は地方からの参加希望者の交通費の一部として充当するため、首都圏在住者は交通費も自己負担となる予定です。諸事決定しだいお知らせいたします。
[企画委員会]

(総務) 伊藤博、小館真理子
佐野直樹、山本安洋

広報委員会

猿田博、伊藤正文、高井美香
本間正史、安原理喜

企画委員会

斉藤勇二、市原満、改田晃
後藤恵治、吉成行蔵

推進委員会

似鳥健彦、河野剛、小島葉子
虎谷迦悦

会計監査 北島章、佐藤順子

4. 質疑応答、新入会員紹介など
(以上文責 高井美香)



楽器アンケート 集計結果

前号で会員の皆様の使用している楽器についてのアンケートをお願い致しましたところ、現在までに37通の回答を得ました。

アンケートを行なった時の会員数が116人ですから回答率32%という結果で、全体をまとめられるまでの数字を得ていないということで、今回は回答のあった分に関して楽器メーカー名を集計するにとどめます。

今後もアンケートは続けていきますので、ご協力お願いいたします。

アンケート結果 (回答37通)

(一人で複数の楽器所有の場合があります)

<オーボエ>

マリゴ	セミ	1	5
	フル	1	1
	不明	1	1

ロレー	セミ	4
	フル	1
	不明	1
リクータ	セミ	6
	フル	1
	不明	1
デュバン	セミ	4
	フル	1
ヴェッツェル	フル・リッソ	3
ラウビン	セミ	3
ビュヒナー	フル・リッソ	2
	フル・カバ	1
	不明	1
グレッセル	フル	1
ヤマハ	フル	1

<ダモアレ>

ロレー	セミ	5
	不明	1
マリゴ	セミ	1
	不明	1
ビュヒナー	フル	1
ハワーズ	フル	1
インカニョーレ	セミ	1

<イングリッシュ・ホルン>

ロレー	セミ	7
	B♭つき	3
マリゴ	セミ	2
	フル	1
	不明	2
ラウビン	セミ	2
リクータ	セミ	2
ビュヒナー	フル	1
ハスクロイル	フル	1
クランボン	不明	1
ハワーズ	セミ	1
ディットオ	セミ	1
オロジー	セミ	1

<リードスタイル>

ショートスタイル(ドイツスタイル)	2	7
セミロングスタイル(フランススタイル)	2	
ロングスタイル(アメリカスタイル)	5	
不明	3	

私の選択とその結果

故 熊田明宏

「試練・変革・そして勝利」より1984.6.30

援助金打ち切り発表は冷静に聞けました。不採算部門の切り捨ては仕様がなかったと思えし、やはり失業だな、と思いました。私が解散を認め、新日本フィルに参加し、即止めて、また日本フィルに入った変な動きを話しましょう。

＊

当時、私はオケマンの日常生活に反感をもっていました。暇さえあれば、バクチ、外では仕事(アルバイト)と遊び、エリート気取りで社会常識まるでゼロ、楽器バカの欠陥人間の集合体と思えてなりませんでした。それは、日本フィルだけではなかったものの、こんなオケはつぶれても仕方ないと考えたこともあります。

さらに、オケ内部の対立の醜悪さには辟易していました。管楽器の少数の首席と弦楽器中心のその他大勢の対立は、長年におわたってあったものの、組合と新日本フィル予備軍の対立にまで発展し、そのやりとりがケンカ腰で、お互いの非難と自己弁護にしかきこえなかった平素員には、先輩諸氏の動きはバカバカしく思えました。

両者は、一人でも多くの奏者を確保する

ために、毎晩説得作業をつづけました。新日本フィルの旗あげは半数以上の楽器が集まれば成功の予定で、「一本づり」という言葉が生まれました。先輩・同輩が一人ずつ説得することです。

私は先生、友人に新日本フィルに誘われて一回目の会合に参加し、その日の夜、厚生年金会館での記者会見にのぞみました。しかし、思慮の無さというか、準備不足にがっかりしたし、会見場に組合員数人が立ち合いか中止を求めて顔を出し、場内が騒然としたときに、オレは何という職種の中にいるのかと、啞然としたものです。

それから二週間、遊びながら将来のことを考えました。解散前後でしょうか、テヘラン交響楽団との仮契約ができて、さて、という時に中近東情勢が不安となり、急にキャンセルしたばかりでした。

さて、と周囲を見わたすと、なんとすばらしい弦楽器群をもつ、機能マヒのオーケストラがあったのです。その名は日本フィル。

書記局に様子を見に顔をだしたとき、耳氏(執行委員)に「管が足りないので、一緒にやろう」と言われ、私の方も演奏できるチャンスもあるし勉強にもなると思い、軽い気持ちでOKしました。その耳氏のうれしそうな顔は、今でも記憶に残っています。

私は12年間、演奏活動の総務的な役割のインスペクターを長々とやりましたが、組合とオーケストラの間の矛盾ばかりが見え、争議中でも演奏レベルの維持のために



は、組合中心の考え方しかできない人は邪魔だと思いました。日本フィルは文化を広めると胸を張って吹聴してきましたが、私は文化は世間が認め、歴史が証明するものであって、自分たちの口で文化の大安売りをするのは今でも反対です。

しかし、労働運動が文化運動という形をとって日本フィルの演奏会がとりにくまれ、全国のあらゆる支援が得られた事実は大きなことですし、オーケストラが生き残るための方法として、楽団員の自覚と行動による現在の形態がとられてきたことは正しかったと思います。

この驚くべき歴史の事実の背景には、家族を含めた多数の人の努力と犠牲があります。これにこたえる道はただ一つ、日本フィルが誰にでも自信をもって聴いてもらえる一流のオーケストラに成長することです。

人間が努力と苦勞の末に出会う一番大事なものは、友人と知人です。私はすばらしい人たちと出会うことができました。

(日本フィルハーモニー交響楽団了承のもとに転載)

日本人オーボエ、ファゴット奏者たちによる クリスマス・コンサート

昨年12月26日から28日にかけての3日間、西ドイツ・ミュンヘンとその近郊で日本人オーボエ・ファゴット奏者たちが集まりクリスマス・コンサートを開いた。プログラムは、オペレッタ「こうもり」抜粋（ゲスト：シュトゥットガルト国立歌劇場専属ソプラノ、古崎靖子）を中心に、ピツィカート・ポルカ、春の声を盛り込んだシュトラウス特集に、前半は小編成の室内楽を演奏するというもの。ミュンヘン、ランズベルク、タウフキルヒェンの3箇所、それぞれ満員の聴衆を迎えて大成功を収めた。

実はこのアンサンブル、すでに5年前から毎年コンサートを開いており、もはや年中行事として定着した感がある。中心となっているのは、ミュンヘン国立音楽大学オーボエ科に留学していたメンバーで、はじめはたった3人で教会をかりてやっていたものが、年々規模を拡大し、最大25名のオーケストラにふくれあがった。参加者はドイツ全土は勿論、スイス、オーストリア、フランスなどヨーロッパ中から集まっており、中には日本からやってくる「もと留学生」などもいる。

もともとは学生だけのアンサンブルだったが、年ごとにメンバーが就職をきめて、次第にプロの比率と、それにともなって演奏水準があがって来ているのが一つの特

徴といえよう。常連参加メンバーのなかには、シュトゥットガルト・フィル（昨年来日）でミュンヘン音大講師の茂木大輔、ブレーメン・フィルの長岡大輔、エッセン・フィルハーモニーの水谷元、パリ・コンセルバトワール卒の福田雅夫などがおり、またこのアンサンブルから巣立っていった人としては東フィルの嶋崎耕三、グラーツ歌劇場の平木啓一、金沢オーケストラ・アンサンブルの柳浦慎史（ファゴット）、もと大フィルの渡辺潤也などを数え上げることができる。さらに過去ゲストとして共演した人にも、ファゴットの小山昭雄、ソプラノの古崎靖子らがいる。このほかにも、ドイツ全土に学生が散らばっており、また仕事の都合さえつけばいつでも、という「潜在メンバー」も数おおい。こうした豊富な人材を背景に、この催しは彼らにとっての毎年の同窓会的な意義を持っており、情報交換、友人づくり、交流などに大きく貢献している。新しく毎年ドイツにやってくる留学生たちもこのコンサートに参加して、たくさんの先輩を知り、いっぺんに心強くなるものであるし、いろいろな相談にもものってもらえるのであった。コンサートはすべて入場無料で寄付金を集める方法をとっており、このほうがたんさんの聴衆に来てもらえることと、アンサンブルの性格上つきまとう編成、プロ

グラムの不安定さから、契約上のトラブルを避けるためにも望ましい。とはいえ、演奏会はいくさきぎぎで大入り、また大成功で、寄付金で全員のアゴアシ、打ち上げ費用からゲストのギャラまで賄ってなお黒字になる。新聞などもこぞととりあげるほどである。問題となるレパートリーであるが、ヘンデルの「王宮」、「水上」は勿論、メンバーの編曲も積極的で、「こうもり」、バッハのモテット、さらにはラグタイムからグレン・ミラーのビッグバンド・ナンバーまで飛び出す。またコンサート全部を大編成で演奏するのではなくトリオ、四重奏、オクテットなど



小中編成のものも入れて、皆が均等に楽しめまた耳も飽かせず、かつキツクなりすぎないようにしている。このコンサート、すでに今年のぶんのスケジュールが決まっている。日本人オーボエ・ファゴット奏者であればどなたでも歓迎ということなので、年末に旅行留学などでヨーロッパへいかれるかたは参加してみてもはどうだろうか。（茂木大輔）

スケジュール：1989年12月23日—29日

場所：リハーサル・ミュンヘン
コンサート・ミュンヘンとその近郊で3回

問い合わせ：
Tokio-Bläsersolisten
Eierstr.95
D-7000 Stuttgart 1

茂木 大輔



近況報告

現在、下北の地で大湊音楽隊長（隊員45名）として、元気で職務に就いております。隊員に欠員がありますので、良報がありましたら、お知らせ下さい。清水昭雄

先達、カザルスホールでシェレンベルガーを聴きました。本当によい音楽会でした。まだ余韻が耳に響いているのですが、自分の楽器をなでながら、「同じように、オーボエであるのに何とまあ……」と、タメイキ……。井口博之

2月18日に長女が誕生し、漸く一家の主らしくなりました。オケは相変わらず忙しく、ユニオンでは春闘の準備で忙しくしています。諸岡研史

最近では吹くよりも、マーチングを教える事が多くなり、結構忙しいのです。今年も米国へ研修旅行の予定！ たまには、飲みかつ、吹きたいです。安藤慎章

音楽鑑賞教室シンポジウム

オーボエ奏者であればだしも大なり小なり（移動）音楽鑑賞教室、いわゆる音教といわれるコンサートを体験しているはずである。俗に「ジャリコン」、「早い、安い、まずい」、と言われるように、演奏者にとって必ずしも満足度の高い仕事ではないが、若手のフリー奏者にとっては重要な収入源であり、また、将来の聴衆を育てる意味で本来もっと真剣に取り組むべきコンサートだろう。この観点から、きたる8月19日東京・星陵会館で、「音楽鑑賞教室シンポジウム」が開催される（日本音楽家ユニオン主催）。ユニオンが「組合」のイメージを脱却し、新たな展開をしてゆきそうだ。

（問い合わせ 03-476-0971）

外国勢強し！ 名実ともに国際級

になったオーボエコンクール ♪ 高井美香

昨年11月、お茶の水のカザルスホールを会場に開催された、財団法人ソニー音楽芸術振興会主催の第2回国際オーボエコンクール・東京は、上位入賞を外国勢が占める結果で幕を閉じました。

3年前に行なわれた第1回を踏まえていくつかの点で改革がなされていました。招聘審査委員も、前回もつとめられたベルリンフィルのシェレンベルガー氏に、アメリカンスタイルの代表、シカゴ響のスティル氏が加わり、より視野の広い審査が実現しました。（実際、おふたりの意見がしばしば対立し議論が白熱したそうです。）こなさなければならぬ曲数も前回は大幅に上回るのべ12曲となり、参加する方も外国の国際コンクールなみの準備が必要となっています。今回世界7か国からの参加があり、上位を外国勢にさらわれたことを考え合わせると運営委員長の大賀典雄氏の講評にも有ったとおりようやく名実ともに国際コンクールとなったと言えます。

画期的だったのは予備審査（テープ審査）の導入。参加者は4月のうちにヴィヴァルディ、シューマン、ブリテンを録音し提出しなければならず、この段階で世界7か国から応募した91名が52名にじぼられました。ここで涙を

のんだ方も多かったわけですが、予備審査を通過できなかった場合は参加料を払わなくて良いというのは良心的ですよ！

第2次予選に残ったのは15名（うち日本人10名）、本選に残ったのは6名（うち日本人2名）でした。第2次予選と本選ではチェンバロの使用が認められました。欲を言えば本選の協奏曲はオケ伴奏だと素晴らしいだろうと思うのですが…。次回以降に期待しています。

それにしてもステージ上で感じたことは、観客が少ないことです。ショパンコンクールみたいに満員の聴衆が拍手してくれたら参加者ももっとノッテ演奏できるのではないかしら…？

〔審査委員〕

委員長鈴木清三。小島葉子、似鳥健彦、丸山盛三、ハンスヨルグ・シェレンベルガー、レイ・スティル

〔入選者〕

- 第1位なし。
- 第2位アレックス・クライン（ブラジル） ジャック・ティス（仏、ラムルー響）
- 第3位ピーター・W・クーパー（米、香港フィル）
- 第4位アンティエ・フォン・モック（西独、ベルリン芸大在学）
- 入賞 井上昌彦（東京芸大1年）
高井美香（武蔵大学卒）

推進委員会より

オーボエを志した人たちが大同団結して、美しいオーボエの音楽と楽しい和の世界を作ろうとするのがこの会の目的の一つであります。ですから、ほぼ100%の加入が望まれますので、皆さんにはさらに勧誘と説得をお願いしたいと思います。100%に達する頃、できれば来年あたりですが、JOC主催によるオーボエフェスティバルを開催して、更にアマチュア部門も含む大きな団体にできれば、というのが大きな願いです。似鳥

投稿大歓迎

よしあし第8号は11月1日発行の予定で会員の皆様の意見をもっと反映させる内容にしたいと思っております。ご意見やエッセー、近況報告、広告、写真、イラスト等、何でも大歓迎です。9月末日迄に猿田博宛てお送り下さい。

編集後記 発行がやはり半月遅れになってしまった。むしろ今までに比べれば速い方である。別段詫びる必要もなからう、という、遅刻常習犯の開直りです。 RY